

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12729

研究課題名（和文）ユーラシア地域における分離主義紛争のダイナミズムとメカニズムの解析

研究課題名（英文）Analysis of the mechanism and dynamics of separatist conflicts in Eurasia

研究代表者

富樫 耕介（Togashi, Kosuke）

同志社大学・政策学部・准教授

研究者番号：80803444

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ユーラシア地域の6つの分離主義的紛争のメカニズムを明らかにし、紛争のダイナミズムを説明することを目的とした。研究成果としては、第一に、コーカサスの紛争にメカニズムとダイナミクスを解明した単著を刊行したことがあげられる。同書では、コーカサス地域の非国家主体がユーラシア地域の安全保障に与える影響についても急進的イスラーム勢力を例に考察した。第二に、チェチェンやダゲスタンで現地調査をし、紛争後の地域にいかなる問題が残っているのかを考察した点があげられる。調査の成果は査読つき論文として刊行し、ロシア・東欧学会研究奨励賞を受賞した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

旧ソ連地域の紛争はダイナミクスに富み、現在も様々な問題を提起しているが、この紛争の起源・経緯・結果などを整理し、複数の紛争を比較することで紛争のメカニズムを明らかにしようとする試みはこれまで十分に行われてこなかった。本研究では、こうした試みを行い、主にコーカサス地域に軸足を置きながらも、他のユーラシア地域の紛争について理解する際にも役立つ分析枠組みを提供した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project was to clarify the mechanism of conflicts in Eurasia and explain conflict dynamics. First, I published a book that explains the mechanism and dynamics of conflicts in the Caucasus. In this book, I considered non-state actors like Islamic extremists, their movements, and terrorism how affect security in Eurasia. Second, I had research fieldwork in Dagestan and Chechnya and analyzed what problems remain in the post-conflict region. I published the findings of fieldwork in peer-reviewed journals and received an academic prize from the Japan Association for Russian and East European studies.

研究分野：紛争研究

キーワード：ユーラシア 内戦 テロリズム 未承認国家 イスラーム国 ナゴルノ・カラバフ紛争 国家の構築と解体 ゆれ動く境界

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

2014年に発生したウクライナ内戦に見られるように冷戦後、ユーラシア地域の分離主義紛争は、発生、激化、停滞、再発、長期化、沈静化などダイナミズムに富み、国際社会の強い関心を集めてきた。

それにも拘らず、この地域の紛争を俯瞰し、その構造や成り立ちを捉えようとする研究は十分に行われてこなかった。既存の研究は、実のところ、この地域の紛争のダイナミズムを規定するものは何なのか、十分に明らかにすることが出来ていなかった。これが本研究の核心をなす学術的「問い」である。

2. 研究の目的

本研究は、ユーラシア地域のうち旧ソ連地域の分離主義的紛争(チェチェン、アブハジア、南オセチア、ナゴルノ・カラバフ、プリドニエストル、ウクライナ)について、紛争構造を明らかにし、その枠組みを用いて紛争のダイナミズムを説明することを試みることを目的とした。

具体的には、(1)個々の紛争の成り立ちと特徴を明らかにし、それらを比較分析すること、(2)紛争理論で指摘される紛争の激化・鎮静化要因に注目して紛争のダイナミクスを考察すること、(3)紛争後に紛争地において提起される問題(紛争の平和解決の課題)について考察することが挙げられる。

(1)については、既存研究の多くは、個別事例の細部に注目し、事実関係やその地域の特徴を丹念に拾い上げ、そこから具体的な説明を行うアプローチを採用してきた。これらの研究は、実証面で事例の個別的特徴や事実の発見に重点がおいてきたため、複数の紛争を俯瞰し、その構造や特徴を相対化し捉えようとする作業を十分に行って来なかった。このため、旧ソ連地域の分離主義紛争を比較の観点から分析する研究もほとんどなかったのである。本研究では、この作業にまず取り組む。

(2)については、既述のように個々の紛争の精緻な実証研究が主流であったがために、理論を意識したアプローチは、非常にわずかしが試みられて来なかった。しかも、これらは理論的枠組みを通して旧ソ連の紛争の理解を試みるという傾向が強く、この地域の紛争に対して適した理論を選択したり、逆にこの地域の紛争から理論的問題提起を行ったりするという試みは極めて少なかった。このため、既存理論の適用の際、理論研究者が想定するモデルや紛争の見方と事例の間に乖離が生じがちだった。本研究では、紛争地の政治・経済・社会環境に注目しつつも、アクターの一体度に意識を向け、これが紛争のダイナミクスをいかに規定づけているのかを考察しようとする。

(3)については、既存研究はどうしても紛争そのもののダイナミクスには注目するものの、紛争後に紛争地にいかなる問題が残るのかという点には関心を払って来なかった。しかし、本来、紛争のダイナミクスが持つ意味は、単に紛争を動的に捉えるということだけではなく、その力学が紛争地にいかなる問題を提起するのかという点にもあるはずである。その意味で、既存研究が十分に検討していない、動的な紛争の力学が収まって以降の紛争地に対する考察は、紛争のダイナミクスの持つ意味を再考することにもつながるはずである。本研究では、激しい紛争やテロの後、現在は情勢が安定化していると言われる地域において、現地においていかに「平和」が機能しているのか(あるいは機能していないのか)を考察しようとする。

3. 研究の方法

本研究は、上記三つの作業課題に合わせて三つの研究方法(以下(1)~(3))を採用し、並行的に研究を進めた。

(1)旧ソ連地域の分離主義紛争の起源・経緯・結果をそれぞれ文献調査に基づき明らかにし、比較の視座から共通点や相違点を比較した。ここでは、まず個々の紛争の成り立ちを明らかにした上で、それが紛争のダイナミクスといかなる関係を有していると考えられるのか、記述的に明らかにする方法を採用した。このため、研究実施者が既に一定の研究蓄積を有しているコーカサス地域を中心とし取り組んだ。ウクライナやプリドニエストルについても、この作業に取り組んだが、並行して実施した現地調査でこれまで渡航が困難であったチェチェンへの渡航が可能になり、後述するように大きな研究成果が得られたため、無理にウクライナとプリドニエストルの事例を含まず、同2事例については予備的考察に留めた。他方で、コーカサスの紛争事例については、英語、ロシア語文献などを通して5つの紛争事例の特徴を抽出し、紛争のメカニズムについて十分に考察することができた。

(2)個々の紛争事例の考察、あるいはこれらの比較分析の際に紛争研究の理論的蓄積を用いた。まず紛争地の政治・経済・社会環境が紛争を発生させやすい状況にあったのかを考察し、分離主義地域と中央政府の関係性を分析した。コーカサス地域に限らず、プリドニエストルもウクライナ内戦も、外部からは一体的に捉えられる紛争当事者内部アクターに意見の相違や対立があることが分かったが、このアクターの一体度が紛争のダイナミクスといかなる関係を有しているのかを上記紛争の記述的な研究から読み取り、類型化することに取り組んだ。具体的には、内部

アクターが分裂していれば、一時的に紛争は激化するなどダイナミクスに富むが、アクターの一体度が低下したままであれば、当該紛争当事者は紛争を継続することが困難になるか、紛争の敗北するケースが多数あった。

(3)紛争後に紛争地がいかなる問題に直面しているのか、これが紛争のメカニズムやダイナミクスといかなる関係性を有するのかについては3つの視点(以下①～③)からアプローチを行った。

そもそも紛争の争点に対する明示的な解が存在しているのかという検討である。旧ソ連地域の分離主義紛争の中には紛争そのものは武力紛争としては沈静化しているものの、紛争の争点に対する明示的な解の提示されていない紛争が存在する。このような状況にある紛争の平和的解決の可能性について各紛争の和平案を比較しつつ、紛争解決学の視点から考察した。

紛争後に分離主義地域や中央政府の統制を離れ、独立した政体として存続する未承認国家という事例が存在する。これもユーラシアの分離主義紛争の一つの特徴であるが、本研究では未承認国家がいかに生成され、どのように機能・存続しており、いかなる課題を抱えているのか、そして今後、どのようになって行くかと見られるのかを検討した。

急進的イスラーム勢力やテロ組織などの下位国家集団が紛争のダイナミクスといかなる関係性を有しており、権威主義的な統治と弾圧によって、いかに組織形態を変化させ、存続を測ろうとしているのかを考察した。これは、いわば武力紛争が後景に退き、紛争地は安定を取り戻しつつある中で、テロや抵抗がいかに継続され、大規模紛争には事実上勝利した当局の側がこれらの問題にどのように対処しようとしているのかを考察するものである。また同じく、紛争後の権威主義体制下の「平和」についての考察を試みるものである。この調査では、2018年と2019年にチェチェンやイングーシ、ダゲスタンなどでフィールドワークを行うことができた。

4. 研究成果

上記三つの作業課題と研究方法を取りまとめた研究成果として年度末までに単著を刊行することができた。またチェチェン共和国におけるフィールド・ワークに基づいて執筆した論文は、ロシア・東欧学会の学会誌(査読つき)に掲載され、研究奨励賞を受賞することができた。以下で研究課題に対して本研究を通して明らかになった研究成果をまとめる。

(1)旧ソ連地域の分離主義紛争を抱える地域は、その内部に多様な民族、宗教、文化を内包し、国家の構築と解体、境界の画定と再編を繰り返すことで多数の紛争を経験してきたことを明らかにした。これらの紛争は、単に当該紛争地内部において支配的民族と少数民族が対立しているという図式のみで理解できるわけではなく、それぞれの紛争当事者内部にも意見の相違や、時に衝突も見られ、しかも境界を超えて移動する難民や避難民、あるいはテロ集団まで様々な行為主体が関与している。

(2)このような多様なアクターが紛争のダイナミクスを規定づけている。すなわち当事者内部での分裂や対立は、紛争を激化させたり、その強度を高めたりする効果があることが旧ソ連地域の分離主義紛争から理解できた。これはウクライナ内戦や第二次カラバフ紛争でも同様である。しかし、多くの紛争は、現在は均衡が保たれ、現地は武力衝突が頻発していないという意味において安定している。つまり、アクター内部の分裂や対立は一時的に紛争の動的力学に強く作用するが、そのことが一方の紛争の勝利の可能性を高める(分裂している側は不利になる)ことによって、結果的に紛争は沈静化するのである。

(3)旧ソ連地域の分離主義紛争は、残念ながら双方の合意によって平和的に解決したケースはほとんどなく、現状においても平和的解決の可能性は薄い。この事実が、分離主義地域の事実上の勝利による未承認国家の生成と存続、あるいは中央政府による軍事的勝利とその後の権威主義的統治などを生み出している。後者の場合は、武力紛争は正規戦としては終了してもテロ戦術をもって抵抗し続けるイスラーム急進主義勢力を生み、下位国家集団の彼らの活動はグローバル・ジハード運動(ISなど)とも連携をするなど、旧ソ連地域の紛争の問題をグローバルな問題として提起している。未承認国家についても旧ソ連地域が現存する未承認国家の大部分を占め、紛争の沈静化以後も紛争地が様々な課題を抱え、問題を提起していることがわかる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 富樫耕介	4. 巻 1053
2. 論文標題 チェチェン紛争のダイナミクスとメカニズム：紛争の分析枠組みの提示と既存研究のレビュー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ロシア・ユーラシアの社会	6. 最初と最後の頁 2-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富樫耕介	4. 巻 1053
2. 論文標題 チェチェン現代史研究における強制移住とソ連解体後の武力紛争	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ロシア・ユーラシアの社会	6. 最初と最後の頁 85-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富樫耕介	4. 巻 48
2. 論文標題 「マイノリティの掲げる「国家」が変化するとき：カディロフ体制下におけるチェチェンの現状と課題」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『ロシア・東欧研究』	6. 最初と最後の頁 81-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富樫耕介	4. 巻 1029
2. 論文標題 「ウズベキスタンにおける権力移行：権威主義体制下における大統領の死去と新体制誕生までの経緯」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『ロシア・ユーラシアの経済と社会』	6. 最初と最後の頁 2-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 富樫耕介
2. 発表標題 紛争後のチェチェンにおける権威主義体制下の「平和」：「平和」をめぐる現地住民の言説の比較・検討
3. 学会等名 日本平和学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 毛利裕昭・富樫耕介
2. 発表標題 2 レベルゲームと提携一致度を用いた分離主義交渉分析
3. 学会等名 日本オペレーションズ・リサーチ学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 毛利裕昭・富樫耕介
2. 発表標題 Analysis for mechanism of commitment problems of separatist conflicts by 2 level game theory and coalition cooperation degree
3. 学会等名 The International Research Working Group in Nonlinear Analysis and Convex Analysis (WGNACA) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 富樫耕介
2. 発表標題 「マイノリティの掲げる「国家」が変化するとき：カディロフ体制下におけるチェチェンの現状と課題」
3. 学会等名 ロシア東欧学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 富樫耕介・毛利裕昭
2. 発表標題 分離主義地域をめぐるコミットメント問題生成のメカニズム
3. 学会等名 国際政治経済ワークショップ2018 (神戸大学)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 富樫耕介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東洋書店新社	5. 総ページ数 364
3. 書名 コーカサスの紛争：ゆれ動く国家と民族	

1. 著者名 廣瀬陽子・富樫耕介 (他)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 426
3. 書名 アゼルバイジャンを知るための67章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>本研究に関連する現地研究者に協力を依頼し、研究成果を研究代表者が編集責任者となった学術雑誌の特集号に寄稿を依頼し、同著作を研究代表者が翻訳の上、刊行した。以下、翻訳論文を挙げる。</p> <p>・ラマザン・アブドゥルマジドフ () 「イマーム・シャミーリ：カフカース・イマラートの創設者」 『ロシア・ユーラシアの社会』第1054号、2021年3月</p> <p>・アッバス・オスマエフ () 「チェチェン共和国における「対テロ作戦」：1999年から2005年まで」 『ロシア・ユーラシアの社会』第1053号、2020年12月</p> <p>・ヴァヒド・アカーエフ () 「チェチェン民族の強制移住：政権による過ちと民族復興の困難な道筋」 『ロシア・ユーラシアの社会』第1053号、2020年12月</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------